白の青春

六人の看護婦の手記

医療文芸集団編

白の青春

六人の看護婦の手記

医療文芸集団編

白の青春　　¥420

昭和42年6月30日　第1刷発行

編者　医療文芸集団

発行者　藤山真人

発行所　東京都千代田区神保町1の3
TEL (294) 0418番
振替／東京 85275番
東邦出版社

印刷所　長野活版

落丁・乱丁はおとりかえいたします。　東邦出版社

事実の重たさ≪序にかえて≫

早船ちよ

「白の青春」を手にしたとき、わたしは、重たいしごとに没頭していた。時間も足りなく、ほとんど読書のできる状態でなかった。

そんなときに、ふと「病棟午後四時十分」の書きだし「患者急変…とつぜん、ブーッと、ブザーの音」という書きだしが目に入った。ほんの一ページほどのぞいてみるつもりが、「住込み」「看護助手二十二才」と、第一部の生活記録を一気によまされてしまう。素朴でかざらない表現に、真実味があふれ、じかに、話をきいているような親しみをおぼえた。

何よりも、事実のもつ重たさが大きい。外からはうかがい知れぬ病院内部の機構や、封建的な人間関係、想像をぜっした看護婦のしごとのきつさ、病人のだいじな生命がどんなふうに守られているか、いないか…それは、あるていど予備知識のあった（それだけに興味をもってのぞいてみた）わたしにも、びっくりすることがらの連続だった。

六人の筆者たちそれぞれが「看護婦であるまえに、まず人間である」ことを主張しなければならないほど、医療機関の労働条件が劣悪である。それを裏返せば、病人の生命が守られにくい状況であることを、はっきり示している。（しかも、なにかの形で入院でき、医療をうけられる人びと

は、まだしもで、それ以下の医療不在の問題状況は、わたしたちのまわりに、いっぱいある）

医療をうけるものと、うけさせるもの――この表裏一体の生活の現況には、由々しいものがある。「白の青春」をよみおわったとたん、読者のひとりひとりが、じぶんの問題として考えざるをえないだろう。

健康なとき、ひとは病気のことを考えないものだ。空気が、ただであるように（それもいまは、公害がプラスされたりもするが）健康も、ただであると考えがちだ。――というより、病気のときを考えにいれられないほど、働いている日常はきついのかもしれない。

わたしたちの日常は、家族の誰かが病気になったら、一家の生計が破滅という、あぶないバランスの上にたって営まれている。そして、しごと場の健康管理は、うまくいっていない場合が多い。そして、もし、あすにも病気で倒れたら…。

「白の青春」をよむと、わたしたちは守られていないことを、ひしひしと痛感させられる…こんな無関心さの上にすわりこんではいられない気持である。

第二部の「無産者診療所」には、昭和六年から十一年までの、中国侵略のファシズムへ傾斜する時代の医療の闘いの一面が見られよう。五度も逮捕されながら貧しい患者を守る看護婦の手記は感動的である。「いのちは水筒より軽かった」は、大戦中のフィリッピン従軍手記である。まだ呼吸のある重病兵を、モヒ注射で殺してしまう戦争の残虐さは、ショックである。第三部の「妻、母、そして看護婦」のなかで、わたしは、日本の新しく、強い女性の姿を見たと思う。

「わたしは、けっして、じぶんひとりの悲しみだけに涙を流さないだろう」という、六人の手記

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

をよみおえて、こういう生活記録を、このあともつづけて、医療にたずさわるさまざまな立場のひとにかいてほしいと思う。生活と健康をまもるたたかいが、ひろく、人びとの気持に根をおろすためにも、たくさんのひとに、この本がよまれてほしい。

「白の青春」の出版の意味は、歴史的に評価されていいと思う。

『白の青春』

目　次

序　文……早船ちよ　1

匹頭の中から

病棟午後四時十分……藤　さとみ　11
患者急変！　かけつける看護婦　夕方靴がきつくなるほど歩き通し
教授回診、そして手術　大学病院で患者が安眠できぬとは？

住込み……佐野圭子　31
就職第一日「こんなことで勤まるかしら？」　午前中働き午後准看
護婦学校へ　湯タンポ要求失敗事件　はじめて患者の死に直面
して　不満、かくれた抵抗、ついに爆発　〝ゆうれい〟が出そ
うな山の本宅　冷飯やくさった果物はいや　なんか知らんが日
からお湯がでるなあ　風呂には私たちが入れぬ場所があった

看護助手二十二才……山本百合香　73
薄ぎたないハンカチしかなかった　先生のバカ野郎、金持だけひい
きして　働いたお金で買った長靴をだいて泣く　不良グループ
で初めて得た暖かい心　さっそうと歩く白衣を夢みたが　安保
闘争の中で変わっていく　活動のゆきずまりと失恋　ベッド料
不当徴収だけで一日二百二十万円　ドンブリを一日三百も洗うんだ
から　残飯食べて妹を養う福山さん　つらいのは私だけではな
いのだ

戦争とファッシズムに抗して

無産者診療所 …… 野口ワカ 111

敬礼は腰を十五度にまげること　失恋して自殺した山崎さん
満州にいって思いきりやりたい　水戸日赤の学院を卒業し東京へ
〈昭和初期〉病院でもストライキ　殺された亀有無診の中島先生
逮捕・拷問・ウソの自白　父にしかられ追いかけられて
ちゃんの偽名で工場労働者になる　〈戦争前夜の暗い時代〉五度留置所へ　宇都宮陸軍病院を追い出され　火打石でタバコに火をつける農村の闘士　農村医療に一生をと思ったのもつかの間

いのちは水筒より軽かった …… 林民子 158

「痛院船」に感動、従軍看護婦を決意　家族とも会えず一路戦地へ
まさに餓鬼地獄とはこのこと　あの人が死んだら軍服ください
重症患者が注射で処理された　山の上の月を見てハラハラと涙
「あ、おかず！」と蛙をとって

夜明けに向かって

妻、母、そして看護婦……森　玲子　187

一年だけでいいから東京見物させてよ　お金のことといってはお育ちが知れますよ　看護婦をやめようと編物学校に入ったが　久しぶりに化粧し組合結成大会へ　はじめてのストライキに感動　機械労働者の〈彼〉と出会う　涙がでそうだった新婚旅行　四日も五日も会えぬすれちがい夫婦　つわりに苦しみながら一時間の通勤　医師に夜勤はムリといわれても　未熟児すれすれの子を出産　子持ちを差別する病院に泣いて抗議　母乳がブラジャーにぐっしょり　やっぱりやめるわけにはいかない　深夜戸をあけると坊やが倒れ出た　組合の力でついに保育所をつくらせる　後輩のためにも、もっとがんばらねば

解説『看護婦の歴史と看護の合理化』……大山正夫　253

あとがき……医療文芸集団　291

さしえ・みずなみひろし（医療文芸集団）

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

巨塔の中から

病棟午後四時十分

藤　さとみ

患者急変！　かけつける看護婦

ブーッ。

突然ブザーが鳴った。

午後四時十分。看護室の中は、日勤（午前八時から午後四時まで）の人と準夜勤（午後三時半から午後十一時まで）の人の引き継ぎでごったがえしていた。ブザーの音で、八人の看護婦はいっせいにランプを見た。一の側病棟六号室のランプが点灯している。

一の側病棟のきょうの受持は江上さんだ。彼女はサーッとインターホーンの所に走った。

「どうかなさいましたか」

「看護婦さん早く来て！　加藤さんが大変……」

「先生を呼んでください」

数人の声が、重なり合って救いを求めるのが、インターホーンをとおして、私の所まで聞こえてきた。

インターホーンをおくと、江上さんはすぐ看護室から飛び出していった。看護婦たちの手が一瞬動きをやめ、彼女が出ていったドアの方に目が集中した。

「手の空いている人は、六号室にいって！」

指示をしながら、私は電話のダイヤルをまわしていた。ダイヤルのもどるのがもどかしい。

「もしもし、医局ですか。看護室からですが、六号室の加藤さんが急変したようです。受持の坂井先生に、至急六号室にくるよう伝えてください。それから、誰かその辺に先生いませんか。誰でも結構ですから、六号室にきてくださるよう、たのんでください」

主任の私は、こういう場合、同僚の看護婦を指揮しなければならない立場にあった。看護婦の総責任者は総婦長、その下が七十床単位（二十床や九十床もある）の病棟一つに一人ずつの婦長だ。主任は婦長を補佐する半管理者で一病棟に二人いる。そのうちの一人は、管理者の端くれとはいえ、婦長、総婦長とはちがって、夜勤もあるし、普通の看護婦と同じに働かねばならない。だから、こうした立場上、私の所では、二人が一年交代でそれをやっており、現在は私が当たっている。どうしても管理者の側よりも、平の看護婦としての気持の方がしっくりいく。

私は、受話器をおいて、六号室に走った。もう、二、三人の看護婦が、あわただしく行き来している。

六号室は、十人部屋だ。だから、他の患者さんも緊張した面持で、ベッドから首をもちあげ、加藤さんの方を心配しながら見つめていた。元気な患者さんは、私たちが動き易いようにと、床頭台を動かしてくれたり、加藤さんのベッドのまわりの物をかたづけたりして、手伝ってくれた。

加藤さんは、真青な顔に冷汗をいっぱいかいて、口を横にひきつらせ、白い歯をむきだして、一生けんめい息を吸い込もうともがいている。だが、呼吸は思うようにいかない。もう唇や爪が紫色にかわり、両眼は頭上の一点を凝視している。七十年間大工として働きつづけてきた、しわだらけの顔がいたましい。

ジュジュジュ、ガァガァガァ……。

江上看護婦が、ネラトン（ゴム管）を加藤さんの口に入れたり、鼻に入れたりして吸引しているが、患者はいっこう楽にならない。ますます苦しそうに手や足をバタバタさせ、胸をたたいている。気管に何かつまったらしい。

私はすぐ血圧を測り、脈をみた。脈は弱く、乱れていた。血圧も八十と低い。

「谷川さん、ビタカン（強心剤）とテラプチク（呼吸刺激剤）を注射して！　藤山さん、患者さんが息を吐く時、軽く胸をおしてみて……」

医師がいないこんな時、看護婦はたがいに指示しあい、一生けんめい患者を救おうとがんばるのだ。こういう時のチームワークは実に良い。

大学生のような感じの無給医の坂井先生と、二、三人の先生が息せききってかけ込んできた。

「サクション（吸引）を続けて！」

坂井先生は聴診器をはずしながら言葉短に指示した。

こういう時、医師が四人も一緒にかけつけられるのも、大学病院なればこそ。人不足のいま、一般の病院ではとてもこうはいかない。大学病院には、医者でありながら給料をもらわないで働き、

研究する、いわゆる無給医局員が、有給医師よりも多くいて、病院運営の大きな力になっている。この病院でも、昭和四十二年二月末現在、有給医約四百二十人にたいし、無給医が約八百人おり、入院診療のほぼ九割、外来診療の七割を占めているのである。

「空気がほとんど入っていかない。サクションだけではだめだ。マウス・トー・マウス（口うつしの人工呼吸）するから、ガーゼくれ……」

坂井先生は、聴診器を投げるようにふとんの上におき、手をさし出した。急いですぐ必要な用具ばかり持ち込んだので、消毒ガーゼなどきていない。江上さんはあわてて準備室に走ろうとした。

「そこのガーゼでいい。急ぐから……」

いうが早いか、坂井先生は未消毒のガーゼを四つに折り、患者の口にあてた。患者の呼吸にあわせて、二、三回呼吸し、大きく息を吸い込んでから、ガーゼをとおして口移しに空気を送り込んだ。それを、二度三度とつづけた。先生の顔が真赤になった。相当抵抗があるらしい。

加藤さんの呼吸が少しずつ楽そうになってきた。大川先生が胸に聴診器を当て、左右の肺の呼吸を聞い

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c